校歌作詞 国分寺が6曲

文人の武蔵野

土岐善麿 ①

土岐善麿（1885～1980年）は、その95年の生涯を通じて、歌人として多くの武蔵野を詠みました。土岐の武蔵野は、大きく3種類に分けることができます。

一つは、学生時代に吟行した武蔵野です。前にもこの欄で紹介したように、その時の作品は、若山牧水の歌とともに読売新聞に連載（1906～07年）されました。

二つめは、武蔵野女子大（現・武蔵野大）文学部の教壇に立っていた時代（65～79年）に詠んだ武蔵野です。その時の作品は、「むさし野十方抄」に収められました。

三つめは、校歌の作詞です。御子息のご協力にも恵まれ武蔵野文学館の館員として調査をおこなってきた藤井真理子さんと丹治麻里子さんによると、26年から79年にかけて、計280曲の校歌を作詞しています。土岐が作詞を引き受けた学校は、旧植民地を含めて全国に散在し、小学校、中学校、高校とそれぞれ満遍なくあります。数は少なくなりますが大学もあります。その中に「武蔵野」「むさしの」「むさし野」が登場する校歌は、少なくとも17曲あります。

国分寺市にある武蔵国分寺跡

17曲の分布は、国分寺市の6曲を筆頭に、府中市、小平市、調布市、武蔵野市、中野区、杉並区、渋谷区、豊島区となり、西東京市は、「武蔵野女子学院歌（第二）」だけです。明治期には武蔵野と呼ばれた田無や練馬や世田谷の学校からも校歌の作詞を依頼されていますが武蔵野の語は用いられていません。国分寺市が多いのは、武蔵国があった奈良時代に地域を護る国分寺が建立された場所であることから、地元の人にとっても寺院に生まれた土岐にとっても、特に武蔵野を連想しやすい土地だったからだと考えられます。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

おすすめの1冊

「校歌の大甲子園史」

毎年春と夏に甲子園で行われる高校野球。高校野球を見ながら出場校の校歌を聞くことを楽しみとする稀代の校歌愛好家が、代表的な校歌80曲を紹介する本を出しています。土岐善麿が作詞している帝京高校の校歌の紹介欄では、「石神井川」をモチーフにして東京の郷土色を出している点を特に高く評価しています。

（渡辺敏樹著、地球丸）